

水・地球・ロータリアン

水戸西RC 小柴庄市

水という、非常に広義の題目でしたので、何を発表したらよいのかを考えている時の、12月21日 日本人宇宙飛行士、野口聡一氏がロシアのバイコヌール宇宙基地から宇宙船ソユーズで国際宇宙ステーションに飛び立った光景をテレビで見ました。

思い返すと約50年前の1961年、人類で初めて地球を飛び出した旧ソ連の宇宙飛行士ガガーリンは、「地球は青かった」という名言を残しました。裏を返せば、今では誰もが知っている青い水の惑星の姿を、つい50年前まで人類は知らなかったことになるわけです。

薄い大気のヴェールに包まれた、水の惑星は二酸化炭素などの温室効果ガスによって熱の発散を防ぎ、もしそうでなければ平均気温マイナス約20度という極寒になるはずの地表を暖め、そして動植物の命を育んできました。しかし今、その精妙なバランスが崩れ「青い惑星」は今、「地球危機」という大きな脅威にさらされています。

この脅威が意識されるようになったのもつい20年ほど前からです。1997年には「国連気候変動枠組条約」俗にいう京都議定書です。これが結ばれ、2008年春から温室効果ガス削減の約束を実行に移す5年間も始まりました。しかし、こうした歩みをはるかに上回るスピードで地球の危機は進行をし、もはや誰の目にも明らかな、差し迫った脅威となっております。

地球危機についてはつい数年前まで、「長期的な気候変動は予測できない」という考え。「将来の技術革新が解決する」という根拠のない楽観論、「個々人では何もできない」という悲観論が多数を占めていました。しかし今では「地球危機」が我々人間の営みの結果であり、過去65万年の地球の自然変動の幅を超えて気温が上昇していること、またこのまま放置すれば、今世紀末には平均気温が5度近く上がるといわれています。

こうした危機意識が定着したのも、実際に地球の各地で、目に見える異変が相次いだからではないでしょうか。

南極大陸では氷床が海にせり出してきて崩壊をし、北極海では氷が溶けて、餌を求めて泳ぎだした北極クマが力尽きておぼれ死ぬといった光景を、テレビで見たことがあります。

また「地球第三の極」と呼ばれるヒマラヤでも、巨大な氷河はやせ細り、氷河湖が拡大して地元の人々は決壊の危機にさらされているといわれます。

すべての天変地異を「地球温暖化」の一言で説明するのは無理であり無責任だと思います。しかし、長いあいだ自然の摂理によって制御されてきた地球の精妙なメカニズムが、過去40年間で2倍にまで増えた人口、2.5倍にまで増えたエネルギー消費によって、大きく崩れつつあることも否定できないと思います。

確実に言えることは、この変調は地球がかつて経験したことのない出来事であり、そのリスクは誰も予測できない、ということだと思います。氷山の削減や海面上昇は、どこか遠い国の話のように思えるかもしれませんが、干ばつや大型台風が多発すれ

ばおおくの人命が失われ、穀物不足は私たちの生活を直撃するでしょう。熱帯、亜熱帯の感染症は北上し、私たちもその脅威にさらされるでしょう。

この危機に対処するのは容易なことではありません。何よりもイデオロギーや宗教、国境や政治体系によって分断された、私たちがこの危機においては運命共同体にあることを意識しなくてはなりません。

そこで私たちロータリアンが一体になり環境問題等からの脱却の道を探ることがますます重要になってきております。

50年前に初めて地球の姿を見た私たちも、地球を無限永久の環境ではなく「限りある壊れやすい環境の星」として、その危うさを自覚すべき時期に来ているのではないのでしょうか。

今回、水というテーマをいただき、水の惑星地球の脆さと、かけがえのなさを考えるきっかけとしてお話をさせていただきました。

ガガーリンの言った「地球は青かった」が過去形の青かったではなく、水の惑星地球は本当に青かったと言いつけられるよう、今後とも水問題、環境問題に取り組み続けていきたいと考えます。